





八雲抄序

元豐文庫

支和諭者起自八雲出雲之右風廣二十丈
其聲或以雷雨言其水流處謂林逋鮮其聲
已來貴賤然一通俗推之絕而不學素有
丹鳥之窓悲詠；干一字之句安瀕玉圓牟
知驟驚；殊不視上邦誰識英雄；謂前
以依代記文付家；髓骨神妙一篇先達
只傳故人教誡雖可顧問依詎類不廣遺漏
誠少才一函義才二作法才之枝葉才空言
諸才五名而才六用意雖非六義；被錦

且為一身一鑒也錄為六卷右曰八雲冊常置綺席側湏緋癡忘而已

八雲冊卷第一

正義部

六義

席代

諸方

旋頭

忘心不著

諷銷

皆冠

物名

連被

八病

諧合

詩會

字書

短句

或平
長句

反方

普通平句
或複雜句

迴文

打勺

鴻冠折勺

黑折

贈答

口病

七病

六義書

一風りのうすくわゆるよがすうは
もすとひそむらむかはすとつて
雖は済よひやひきをさまく
すまくとくやくとく
之に法天の徳とやはりとえす
て難波あたつすと玉行ふる
なり早可有躋祚といつて
二賦うきやゆるもくしてつて
りあ。たひいほみわらひま

およひづつとひつとへらすて
古今の事よりてすとひつとあん是にまく
つまともうき

とひのなまく食せやなまくてもせあく
みうてうとりよあくつむな

君よけさりのあくがくといふ
立そよびすうたうよくかくすそえも
やうく

めうらぬのあやでうのみうこく
りよきくわうくわくわくすて
で興しゆくくま

わうきくわくはくはく有とあれ
とぬのまかくくみほくすく
古今よきくよ因やくよきとすく
ゆくくくくくく
とぬのわくくわくく煙風とくく
あくふくよくよくふくくよく
えくふくよくよくふくくよく
立雅へあくよくよく

وَلِلّٰهِ الْحُكْمُ وَالْحُكْمُ
لِلّٰهِ الْعَلِيِّ الْعَلِيِّ

いきあひえすと今よつて
うきよめふはまつてゆく
いきあひえすと今よつて
うきよめふはまつてゆく
今素戔アカシとし
えんさんわくゆ
よほらアハラの御ミタマ
かえりむれに
おまのくすりの御ミタマ
ゆふりてゆく

たまつゝしとくのまゝにいふて
もあつて下りぬじむるを取のひて
とこしやまへゆ國事也
かかのくにきくは三首い
わうとくもみまくすく
くまくらくにゆくまくすく
大略用ゐのむす
ようちくわくわくわく
さくわくわくわくわく
あくわくわくわくわく
あくわくわくわくわく

序

首一也。合之不一，繼之序也。
真之以毛，也之以柔，以之以柔，也之以毛。
毛之以柔，柔之以毛，毛之以毛，柔之以柔。
毛之以柔，柔之以毛，毛之以毛，柔之以柔。

てても人を多く一者より之へ送る事
多し故集席と曰ふ也古序とすま
眼不足て不及乎細後拾遺千載の序
ひり短詔今の序肩尾ありし細
はまを外めよわくまほせあひの序
代へゆてかく一いき細らよひあつた
ぬ物也あらば頬頰ゆゆとては有
なむれど也若くもてては有
清浦曰正房真名序もてて細よりてを
少すゆて般の序あるゆゆ可

あくとる、なげて因るのタガヤ
百葉道も無と同とといはれぬか若
ならと多時代のやのすてよめます
ぬとへあさうのまつりかふらひタリヨリ
えの川のとづけせじ揚げ不和夕を
短身

歸明登金書奥山望國く時仰察
アモトマヘシムアドテテヨウヌアマツシ
ウカイタクムニミル、クヨウハキナヒ
ムカシハ角あらたのアリ海國をもての
アモトマヘ

檢稅使大伴卿登疏波山時作

莫ニシテ稼ヘバシヒトナムシモニモ有モ
はくくは立てみハ不れりトモアムヨ
リカモモシモシテナヨイリモミテアム
ウニ風字自派あらぬはそのトモシキ
な處ひ少しつつ、トモシヘやあ
坐三首百葉の申ムヒト裏はこゝに見
ゆて耳をひとりわく左今以は左
干今だうも見えづらヤシテ確多行

擧及躬恒を長きに及

よりゆり拂々月とやし給ひ一畢すもあ
る時のみまくまくゆきの吉野身
すわらじいし日はなむか玉れとせ
れらじあれかと夷うりつやまち
庭の雪ひきゆをまの今隠く
白霜もアツコシてあふれひとまど
そくはか

此句、源氏平調調婆散事、惠以雖れ魚
水方食むてゐりせか行殊是可又

殊勝也。そはれ魚あ方へ不以復れ述
懷有とはふるへ不及え曾く、臺灣城
可持南施而依不魚あ方不入く、柳葉
舟旅、舟車有ぬ沉没、并孫姓或之所
稱長秋桂撰、并新撰體體。よひく、傳
短句普通、二十一字或之謂長句、万
葉又以二十一字謂短句。

又万葉中、まくと二添ありて何、但非
普通事、所謂寫、いみの中九郭、ひと
りありすや後れ云經事八缺取事と

ノア後成古東風叶抄云雖有兩說彼人
多主之者謂之素法也即時旋音と放出生音
諺長音と後稱曰長音とす用するといひ乍り
やうゆの稱長音アシヨウヨウトシテ稱短音アシ
モト雅史之子細也不發此說アシ

反音 常サ一ミツノトキタリ

是旅音と奇也雖不限一音或兩音可
諺ノ万葉二音ニテ ホシテテ此而常ニテ
ヤ短音と長音也惟他事一類ハ脇ヒ多メシ
其事也

諸音

一
枝奇

後れ母懸音と古枝奇大略乞何ト北懸

有ル

一
相因 以應る事ノ故其相生者莫如秋也

是皆主反音也以是可切也

彼れが立音セテノ但サニ此立音有ル事ト
夕思人字セテ物而以應る事近万十二古
今相因往來音類ノトトアメテ、モ内
而本心諸音地陳思同名羣猿數思懸前字
トありル而勘

一辟喻

ゆく人有りてソア但みるに止むはれ
寄衣喻思有り喻恩ソア唯寄め
奇也

一回答

回答也防人有り大賄用す乞高車て為
回答ソア二直也回答と答ひゆうソア一
向二回答

一相歡

寄物思人有り五十七年天平十八年八月

朝中様大伴池主附大膳使赴向京仰云因
年十一月還到り御内設酒萬葉綠飲
樂是日也向高忽降積坡人余此時也漢又
く船入満澤國夏守家持卿寄清飛御裁
候奇武寄君舟至く思
モソツモソ

旋臘奇

三十二字。ソア一句ソア人有り也普通有
し立の事ハナカセ幼立セ共ハナカツヘの
事れ相手てモハセ字有り或立字有りと傳

あらわすとおもひてよるかにてうる
有ゆゑてはいへりてゆる事なるが
まことにとてはいふべしとてはいふべし
まことにとてはいふべしとてはいふべし
まことにとてはいふべしとてはいふべし
まことにとてはいふべしとてはいふべし

万八也

みのくふれうとおもなうとあま
むみのくふれうとおもなうとあま
是ハ中より立と廢す也

あきはししはしきよつてゆるを

アモトクヒルハレハアモソ
是ニシカウトアツトナリ

御す縁をこすりよしめてみゆ

是ハ中にとまれるとてはりあ

詠頭をあひりよ天からうるか
の詠頭をあひりよ天からうるか

よりしもかくいなげとて耳をとせと
え朝夕をじつうもぐくも

とんとまつす又五セニカミナリモ内
と真トヨ

春はひすみのあれがまめなまかせ
月あらみのぬれとめうらりき

とらうる

もろゆきの歌アリモウレ

とらうもカセカセトトト
寝やす

と十一字内一トトトヒヤ又有タリテ不足
と一ツカタアリテ普通ルヨハハ

ムヌアリタモウル

あさうのよひりまくらノ角

きののよや

きのよみのよみよみのよみ

岩のよみよみおねね

あさうのよひりの

とまつすまつす十二字行りてまのせ又

まつすまつすぬい行りてまのせ又

いとん小町すうやてのゆや若無ふ

とわくへまほのまほもみえす唯古今

席よへもととづく

廻文奇

是の御みぬるをすむゆく也
ひくよくめぐらすふく
下はもとものうよりし
とづりぬ
下もくやねるとゆるやた
こみすれあよ。ぬとすり

意取着

百葉十六巻。有あるもあま

あゆめひのすくよなにりの
玉丸もうちいよあくもくわ
といひのくのじへり
わせうたじよもうすく
よびのやすよじとくわ
右の書人款玉令侍座向或有作考所
ゆく者賜以絹帛千疋大舍人其信
朝廷子祖文の作斯文獻上金時以至幕
物語二事又吟く也

詠詩奇

是らうすよりよのくは、一も様
人を、二は徳を、三は不知く而通彼を、
とえあつあつとまん入於は捨遺遺傳
云入謝得すあくとるのまほれ、被詔
誠如不絶詔絶不知りのとすまく未だ人
非可定又千載集よりあり大へいまと
うつて風、んじゆく推すゆすと其指
知事す、以捨遺千載集よりくま
物がのすとくまくまくまくまくまく
やわらん但是とあくわよ定すれども御

可見古今也或況曰詎詰有指

一解

二訓

三詭

四解

五詭

六詭

七元獻

八詭

九詮

十等子細末并く

折句

毎向土物をとみまは、とくとくとく
とく衣をうづれかくまくまく
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく

老の身の爲めに
心をもてぬ事無く
不思議

折向忠冠

秋山もみじ

劣冠

幼少の頃より其の才を認められ玉成の如き

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

蒙古の元氣を
アーヴィング

蒙古文

میخانه
کتابخانه
سازمان اسناد و کتابخانه ملی

وَلِلَّهِ الْحَمْدُ لِأَنَّهُ أَعْلَمُ بِكُلِّ شَيْءٍ

卷之三

是物也者
不以爲
是也

卷之三

因物を以てこれに付く事ありと
非そうれあると月のうへてはる
もいへりてあらそひのとす也而古
今捨遺するかわくられぬと有せむ
那へるゝものとやうて思ふてあり
しきのうへてよるゝものと見るの
きらんとす御也

贈答

是の事とたゞと云極て大事にすと
の事としてあへりよと云ふ

まよせぬと持てほほへぬりあへ
うのゆゑとすと何のうへゆるつて
あやよさぬといふすまよし又前
もひもやもひよひよひふれぬ
してうもるとありんあうるまよ
ゆくとくとくとくとくとくとく
あやわらきとくとくとくとくとく
作はぐりとくとくとくとくとくとく
て安信清江小町

はくわくとせよのゆくとくとく

人をみぬのれどいかへ

さうすま町（まち）、

きわうなりけんと神（かみ）。玉（たま）もす

御（ご）やまう（もあまう）川（かわ）すま

葉平明は家（いえ）よひきうやよ敵（てき）、

アマのなあよよひうき川（かわ）

神（じん）のもひてあす

さうすま葉平（はへい）すううとて

あひくさや神（じん）むらすくの川

カミハナうとくうひだのまん

大武（だいぶ）と位（すゑ）にいふはまうとこやせ

まゆんこくゆくゆくともまゆくれ

そとにとひくへ思（おも）へひくよん

とありきう冷泉（れいぜん）やのれや

もあづのねすつまゆくとて

君（きみ）もとせひけとゆ

うれのめいじあくとせすうれの

うよなうめくまふれやしきとゆ

うよまタリとあくまするれのまく

風（かぜ）うとくうひだのまく下禁（げきん）

徳潤とて貴重とすりてすきとわ
みくにまかんとくのせよのれと
君とやまくはしもんとえどと
めやを古今の教訓やよりむじやと
りやうりいきれとくとて四下
とくとくせりひるふらのまのとく
かよみけり後頬せゆふりい
らゆんかくへりともつてとくアリ
くがれるるわのう前今タリ天
みふひきするなほり集まふれあ

事のそくかあくべれやまと河ひし
下とくへは一束院長日引寺もよ上
東門院としてあてうづくとて

は城寺入道

よのやうととくとくすり野の
あくらまくわねくれ

よ

くまくまのひつともとくとく
あくらまくわねくれ
すよのとくとくとくとくとくとく

甲 久須やうらもあひくとおひふ
うす二句へ又のひのひえ又えりみ
そとろれ様すうつまを頬

（あ）

わきかねとあよもとめられ極く
うるよゆきとすりてゆらじて
こつづくやもへりくすりうとあくす
こもじいえまれなくつてとくに下
されへ何ぞよいかて葉平、とや下。
きくすあすはあとさうか

消ちへ何ぞよいかてみす
是えいじうの様せきふすもううとも
すもも是あとくにくくの下たと
葉平へとにくにくとくきくらや殊々人
もゆかとくゆゆす有下者今夕
けりまへ一萬よもとわまへやまくらそれ
よみゆくともやあくわりくわのり
こすくへりゆよなうと又のりけ
くゆよなうとけでれどもとれいの
のやあくわくくわくでれども

異部

角へやくの難所としむれあひ
もなじまくのゆきにほほ
アモ歌や音同字をもとて
さのじみえぬよらへいうんく

あらんかわりくすりほ
くそり所のまきもとよめ
つまつまよつてあり万葉
ねづみのいよおつましもとて
むまつまよつてあり万葉

さうなきの居下りわふ立
やいり又三年、百武志ふきりてひ
半多一九井代よりくまくゆ
ゑひとすとしうそけのあひよの八雲
いづく三十一言の文、なまよ
をきの難所と有

連歌

首五十韻百韻とほくらすう、
上句かくと下句かくといひひつて
よみがくと付ひつたり今のかく

ヨリ中はノリノリ事也賤物ノリノリ中は
ノリノリ事也一方豪傑がへたる事もと家持

御付

ひが川のふくやまきりと田と

家持曰

フロモツツヒヒヒヒヒヒヒヒ
是連歌根源也其故が生下はよ付よ又
普通よとそとソソタニトヨ付ひ考白
ゆくがく行る也或人

ひぐらしのゆうひのゆ

ソシナヒ家貞朝臣曰

ゆあよしあやとねとすよ

又天鷹

ひよゆりてひよゆりかづく奴よ

滋野内侍 小糸今帰
セミ

萬よあよくまよくわづら草ト
是あよとちのよせ北野ク事而汝有よ
多連く近代ハ如法事也古ハ是とぞんと
をひとにあひゆき不なは付取實近と
モ繁多事ある付く有サル取實文

桂樹の如きも可なり。

一
翁の於高座下
かく
古河今之
うす或之時執筆連句入歌と連詩翁
向事比向むて也
古今事文

一
翁の心事
秋の風す

一三句中より痛い
句五句中
ゆき同書へ用意を
ゆて之へ送り
すと之を
一月の連
詩より因る所
事也

一
上
手
に
書
か
れ
て
い
る
よ
う
に
見
え
ま
す
ま
も

まやじくはれ。ひらす雲。てとふ。
そよごひはりまう。もとへゆる。
いしいきりあわせ。百額の中
ひきぬる。五つある。わざつだに
連歌を。河。まか

一
是下句。上句。橋。
こちて。しる。の。ふ。
けり。よ。さ。く。の。月。
ゆ。あん。す。く。わ。ま。

一
角で連歌を。わぬ。持よ。も。や。
くはゆ。是。か。く。母。す。ひ
ち。連歌を。わ。う。つ。く。う。え
ま

一
手で連歌を。し。と。な
手。も。の。を。く。連歌。と。く。
お。葉。せ。い。き。そ。れ。い。く。よ。ん。す。と
ほ。れ。葉。一。ひ。な。れ。よ。う。き
く。う。れ。と。よ。い。わ。と。あ。う。き
と。お。い。れ。と。そ。れ。ん。と。れ。さ

卷之三

そぞれ其人のいふとえゆふ
こなわぬ人をひきよまつて

一傍の賤物も手に取らぬ

連句の教本

は
い
て
あ
る
や

呂海民

風情をうやむる教不かアリ みふるを
下 後れが向の申よりつまこと
りひきうちやんのうへーもとけりくよし
くそひすわあしととめくはるのよ
みくまやといひなに といじて人を
やぶけりきんといもすくわやひき
連すよせひくまひ川のよとやまある
れまきくす葉集のよとよとくさす
うてあじとくよとおうとまよけ
あへきうもしらうるふとらう誠
也祖國代百句五十句とぞんじゆひのを風
りしきくへきあまくへあくへくよとく
すうたと連歌ひく風情とはくす
きのやよなじまとよじりります
くはくすとよなきへじくめあく大事
通経期ほう歎をねどもしてよおづね
れあとすくうよおゆゆせんわもくわ

てひふをひしりひよ

くわせよらあくわくうきてき

こひひうりひつよあゆのや房りれ

じひひよ行脚大捕り

こくえもいづねのひわ

くつをみうけ勝手すとむあく

ふくまよでまえふりへは良選

まうるの、こまくさゆうのぬ

やつうよ歎と人情過電と真言

ゆくうなずき育て今とくあひられ

ゆまへゆりあうとありすくと大す

すうるを凡今よしひきとすり連々

先例文まのうすがくや或幼立之字と贋

或よ下トシテも又云下句如其事

八病　毒撰式

一 因病

或号和藪解病

是日幸れてあらわしめある
不謂く

遍照

物やといふらもよみ下てわれよき
つとすまんとまつともやく

躬恒

二
亂思痛
或考和散述痛

老い詞優るゝよめうと
わいふらめうとみのいと
河原の風のすゝ派の
いみの歌中の清のみをかに
ゆくよきえじかくの音と
たみゆうめんの歌下ふを人をかく
一楓蝶痛 武弓和平歌痛
是いわぬてまくせや

えりのくゆるする蟬
さうきよもてしゆう何もうとも
これ又下あく下もし腰も背筋も上下
れよ疎もり是も下すもつと下り
て漏鳴病 或モ和上尾病

是編よ是よじよく病不常下り

人となりふてはめのわきよもとを風
きよくのよみえなりの
くよれを被る老ゆきけのく
えりよとあすこりりり
こりよ常よとくにされんよあらまに
くより

五老鶴病 或モ和鶴詰病

是モわりよてあくちやもと肩すり

そくよて病よ肩ひやゆりくも
しよよの枝と花よたら草
れよた通すよつねよみゆりよ

六老鶴病

或モ和鶴詰病

是ハ篇統一音の下二用也其撰式云一首

中不善思詠也

七中飽病

或和結脣病

是之三中力多字あつたり。

ひよわいのりと書ひまよ雲の上
りうて走る能みくら
有て浦の源よりもてうるわすれ
つまむはきのそめとらせらへ
是よすさんへ有て 痘頭身にあ
へ

八中悔病

或和解鐘病 或混卒し 詠青蘋不晴也

是妄風情放情也後悔向多とまみでふよ
みくねよと見相ともいひうるやうなりと
云

中病 棱撰式

一岸樹病

キ一白瘡者二白瘡也後

夏ゆきりりとあよけうあらひ
もうれ下草むかづく人ふ
わまの河河をやあら派みうは
まくじとれいとじう

えうれいのさや白瘡もす

いふく物のよろこびもすすましくす
らす

二 風燭病

身向すニまよすアカモ日

いふくいもれ音ノリシテアトモトモ
もろくいかきとしとシテアラゆ
みぬつて、夜半ノアミハガニギス
アツツシヒテアホのミニゆ
そ嘗めくと教あくひてみぬのゆ
もやもやの座トナリ

三 淚船病

カ言のエヌモセ言のモセモセ

いりやとく御へれどりきり是れ
君のうつむきゆけたよみえは
れもあもちらしてわづく、是れを
アツツキヒアヨウゆ
是へはゆく又そのむれをうま難
古今無事事、あまた入病中
ア病氣病

身向すニまよく世故重讀不思

りのふとるまくわくはくはくす
みよと出つよしんじゆつこゑ
あよもじあくやとよほんじゆ

床より出るは御所れりき
是にまわらむる事ふゆきまうきあひ無
同すえよよレア

七病 濱底式

一頭尾病

葛白絹本二弓絹

喜びての川派めらう
みくとゆゑやまくもく
秋の田へつむりの唐れどゆあみ
我衣もと着けりのまく

二胸尾病

葛白絹本二弓上六絹

じあへまされかのるや

なみりなつ秋の山ゆきねしの

故にゆえきすきんとあひ

と山の志の下葉もらうて
そらへみゆく君へかくは

なみりなつ秋の山ゆきねしの

三脚尾病

葛白絹本二弓上六絹

山風よとくうかづきのひよこよ
らしきうらゆめまのひよこよ

二十九日あゆのまの若風よ

まもじらひぬくいもれども

後頬回右人雖雖先被謫タマ

て齧子病

五旬辛頬下口字有也謂巨病

死ぬまさらてわゆるゑ

めくきふへよけゆ

梅の木風うらわ

あくやのまとらやみだ

是へ下立み字よ同音せせあいね

あす夕

五晦風病 一旬中の字と疾字と風

其あくひ花さんとあくよこ風、そ
野へすすみよあらまくわ
人はよそせじくらはるの
みこりく小ひもゑやまくらん

白内同字乍り

六聲鬱病

ニ頬回字也

芝引のよくわすくらむ
うつゆめもと風ふらすか
一月八重やまともむしむけよ

往つてよりよしといたのりん

こくらのひのかくちもんのまくせうわれ
字ひ額や下句末同字を後れし病名あり
大卒すとつづく城よこ去る所す

セ遍身病二額中下額ニま以上と深同字有也新撰體體等

常夏ひよりて遙へゝ國

ひまつるふ一ミタマアツモテス
アラ雲ヒミウリヨモクニ吉野の
ヨリハ山の花けり

シテの向まむらるや同字有之モ地盤

有字早鶴藤時代不禁上古夕
又新撰體體禁四ノノノノノノ
とづくひ字ならいづる林あくさと
のきとみの木とづくひいづる木と
又長升ひのひ生石のとじしれもあ
らうて利ひまうひいづる木とづる
りの木とづるひわいづる木とづる
りの木とづるひわいづる木とづる
りの木とづるひわいづる木とづる
てとづるてりりりり

坐三六新撰體體禁也

以上承し林義也が右の林東子

一
之
一
之
之
之
之
之
之
之

わよれとくにあまう

一
水
川
之
水
之
水
之
水
之
水
之
水

おもひしりのふき

卷之三

一八〇四月に九月八日
やうらもとふみ
とよひの湯たかく
わくよゆきあひ
やまのす

住處家令
此病後成難

一派七言八句之文也蓋仰漏如種之友
惟以清之限烹乎心之合在肺乃恒之謂
持之有口之有口也亦可不口肺耳

己八病可集已下集の皆以有不可勝
斗近代又安樂とすを殊に事少也
亦同人病許而禁事多也此言今か老
也懲集不淺近事も雖うまく入集
不為難く家附てことよりかくのよ
きのじつ其の字ニ及寢せり物不す
能なり而やいじくあるなりのじつ
也字ニナリひやれり近比トタ一抑
白れりいめり不為病而後れれり出病例
むるはい夕更よ今古不怪トナリ瀟白

固すれあらとる病ナリ後成回凡可集
已下す可と二句は諺而あくし何
くといひやまと却へれどのじつと
此病レセヨ陳ぬ事ナリ古人の和る事無
も當波と唯病はたゞやうすと諺
上古事如他文

詩合子細

難事文

一一毒丸可也人得く但隨題解因考若人
例也一毒丸す不可肩先例爾も勿
為持右勝す弘徽殿書記合判義志大相模

侍坂乳母又は性子用白家高倉左後未頃
右源定信不作不可事不可為例至か小野
文大后高倉有倒毛非普通事半柳雲
泥草古來不及左右毛と句並のり若
悪不為病れど詠也上右中右されど
嫌うもを謂ひ一折也彼れも不為病
毛仲寛又同

去日山君のねへまくらもかし
もとやれまくよ経つよとて
並句不為歌

一同心病なる雖曰事中の二而も有也 陽白
其が乱思爛蝶清鳴荒鷗老楓以物も病
唯身病くゆきゆき不為歌中飽已上頭尾
不為歌也又岸樹風燭浪船夜 陽白
胸尾聘尾麿子桂風全不為病故 頭尾
上下向牛頭 上下向字並 上下向 上向 下向
雖不為病狀寂上一首同字似ノトモ或無
病但今右流例也牛頭病天法守合中
榜詠此強附えてぬる遍身病事す廢寢
毋幼少所持之肺觀云同字とひづりて

わづひふるより不可出へ也而被宣實和合
詠まれりくろ通のあらへんぐへ之事
木の下風と鶴膝病也勿論事や但五
六と雖此病も因處也又統て字非け詮
限彼成曰有合す同字四行うすと有合すた
つまも有ひ、字にあらひ者と有合す

一 税弓の勝也休射の名と諱アリ又同字東文
安合二書た是日又右セラモ持也承集也
年安合一書是日山ノモアリ平時大ニ
余用白ふしてうゆくつまもて安た大勝と

定字治用白有本心氣批判者水弓今
以部酌稱く税弓角事長元よ長家
ノ夏の被ヒ涼ノリキテ秀逸く上一書
たふよどて赤深ノリノリナツトマム
負手又無れニモ有合取テ又有合。稅
角手足もとをうしむる以上不なま
細也

一 有合手の遠國又前縁トミテ或る雖仍
與代々ト古モ有例是あらうつて也
但因みあらず可用矣月影ノハ

とせりまくと後れとひもとてかくも基
候もいしるの月とよきと小お倉
生シテお取只可依事業屬と云ひの
中山外さぬふとぞと雖も有モ
謂野え今令のくぬ山田又法大寺
た大臣詔とあれわざとよき取事
し根令の内ゆの所の誠不可違今事
も雖也唯て李家不とくは皆被く賜
一月のよのうまでつづきのと後成詔
く誠安経親

一日不可去く不謂行跡太捕う小夜アリ
て暗のえみては寝てのうと風やよしむ
わらうんをりするあり之文を含みぬ
人の事シヤふとあいはづか淮と志ん
羨まよめりとつづきの故不爲病
是も病アリムヒと云ふ或に苦と牛と
て不爲病万葉の幼病アリカニ日向
病も病也長えす合體固クす云ば良病不
猪南亭すれす合是則うみうとやある
てすれぬ

一同事とよひゆつが様にて様をむる美
廣孝君震蕪も蹕放難相續記此病を
解宣ひてのちひきにけりけり為せりれ
といづらとは代よ。之は經緯痛く解可思
惟す也

一岸樹病れ可まえだ大博會は京後成
判神の事元より御難玄泉定て
通日令與人共非深咎矣

一同ゆすわくわぬりゆくよきされ
一松のじまきまくじまく君もみの程を

あゆ、是の句合ふねと御後後拾遺同
名雖くあうけますとゆくとあゆど文字
異なり或る雖或不雖有合ふ不雖する
も有又雖すも有撰集の旨多以入し
何とはゆひのれ。やうゆ
れ計と教とをも陽也多合ふ。通後、
月のけとひづととみる秋の夜と
なじに其日とありいき。は

勝平是益与日也

一
ひよとわゆの雖いはへ八重山の
けふんといつと小野までへ八重山まで
あるべすと云如世雖也又長元寺今
山の海といづる美鷹屋扇もこの海を
賣代ひよふりといつとあ館の事え
如世事不可勝斗もく可雖く紙雖
有下すほ事に可爲雖也

一
ひよとすと雖天法寺合寺水藤源房家
よ御こしもあよとめこゆよとせあ
既や亭子寺寺令。併様つや志

のゆれの移花、ことわくのゆれ
ニシテ恩去年捨今年と恩去年
不捨とひり非雖も長元寺入ひ
川ゆき雖つてもここんす指令もあつ
てすと極通事みと延房北雖と誠が清
か事也古仲良雖爲経修り事也
萬昌立とと後極雖うきん長元
赤深れとこなつて同已上る中雖
常の事とあく唐言とくの事もす
も謂多作はね撰りうふとすまで

秋とはくさり又不思議事へがとつまは
くもつてこれどても氣氣也も不為難也
一同事の朝うもつてゆくも可為病也年
与礼年主極以恩不可舍勝介礼上介西徵
子母御令中務持良憲上新寅和
合唯歲為持或不為病とて是あへ病也
准く多る事亨子代有合勅判當事は
みりあらそ後賴基後大謂病清拂不為
病也る根同事也或不病とて是ら
病也准く多る陽院令合通後とて
ふ

ゆてゆの白毛川りまくもくらひて
ぬるゆりきり又因令合風總ぬれ文よ
よことしてゆうのゆくゆくつてこれ能
強取共持や向よ青臘房令合勝獨よ人法
性寺用白毛令。時曷うあつまつゆうい
ううも白毛のいぬとてと人よみを
うんとつて後れ曰特よ人よすい基後不
雖仲實為雖今來う隨事是と非病
獨とつてんくよわいりと古今れいり
ひもすし宿のつまむてんと思ふ事

とあしきりとじつは病也又西征は仰りや
よがくしりんへあまくわきてとくとく月をい
きりそみひりそと有難負年徂非深咎
乞月と月年月と月日吉も縮玉と月と
りくをのよ成のん済事の月のいとま
けほくと向朝のふうとうらや可る病を
教とあと病也三事既大聲令す。呻顫
詠く教と声と貞文家を合躬恒為我代
と年老と皆為病也三年漢を合勝年
とくともしとあるやとある六法のあらげ

ようりよとわは是誠よ不病さみ代
なとじしてあよらとせやとじしめう可入
病也、みる者にありせよとゆぬまの
音風よゆくしとまのひうの、病をか
而天德勝年頃家せんて令れりけり
とししてけりけりけりとよと病也は日未緊
改めえとよとよとよと不病通経
寺と後頃為痘病通経四雖有病寺合
寺不勝被定持例

一
われとくのゆう因て病とて病れす

みどりの處子す含勝風ひきういらや
手りと歎えのらひひとわじとま

又寅和胎

長崎

いふゆるわぬくとい
八重うひふ里う風くゆもれ花
又おうづの夏とくちんとみと海せん
つぐうなよむわくつうす
一風とましと六帖

木枯のあらはれ蝶のまこと

つまよ梢。あえすゆく風

先へ倒すまで病やむ可難
一同ゆすの跡絶一首中二節こゆうモ二節
三節の跡く玉扇四節うけこむすめ
立一首と詠

一主言、病ゆすゆす雖く基後
云ひあるありへやくとつと風や
とくに可也大放御内右大臣守祐
の筆すとしいて又いの歌くや。
う基後詠く是くもん用するよか
一詠古く守わきとひすとまうひわく

いと近代ニ流事ナリ先患せらる有す
ナリハ強雖ニテ勝平ニシテはシミ
アリモ歟

一得此諦焉記ヒテ某族底某事一寅和
永義ニ屬奉る陽作有合ノ宵ノ皆不
雖月又同ノ有例ヒテ安志字更ニ非
雖義屬再郁芳門院根合有合同判
者有對取乞想ゆかく天德朝患
ノトモアシトヨリ例ヒテ近代ニ系
字巧クヒモトヨリ遠和有合詩時ノ統

理例ニキリシムニテ子引トアリテ
アリスルアヤウのねとねアズランサリム
時ノトモシホトモ勝平シテシテの景トモ
准シキテ古今以下無ヒシシニシテ
シ不可勝斗更ニ非雖

一族ニ御承前事一家威家令・基後
ハナツノ長事安達某社ハ不税以避輕
為税ナリ柳葉山院寺合ハシニ之の
万代ヨリテテノシテれなシ(ま)ハ
未ハアヤシムトヨリ是ハ跡事也

一 鄭云是未因事或雖々も陽火可合
別總可未因丸有、用とて於後判右肩
根今雅後又肩平組有合有二首々
一 詠述懷不雖寛和哀山御襲追代夕
一 詠述不普通寛和推夕霧守。詠思之組
是也非惡歌

わのアリヨリノリノノ立ニキ
わ汝山ハミリモウリキ
立ニムヨメテ非惡人羈猿ノ思張
立ニムヨリケンナリ

一 侵傍也天德實和己後夕但可依事暮去
と乾子々、吾將當。鄭云未物不可侵也
一 謂謂寛平有、未可合真風棟渠左古今
但不可稱く

一 違不遇立、為常。違後亦不道也而乞
對面實事。是也非統也。但汝即物
諸句無部。取付萬波人違故不違中
咒々

詩合有如屏風障子有同
殊。可去林心忌非之。奇合か。雖不咎

詩合有如屏風障子有同

誠と可思惟君御一者非可依稀
而但能見るゝ為惟是を中心として中に失ひ
ありや忠孝うれ林中白雲のりりめりを
うえはくわくよれやあまくらんと
よみく波難躬恒けりと北吉事之後
松田城川流以守長忠出弘夏後部有下
貰す待て考言出弘月書又事薦川
流中矣元亮仲實うほのふのと
よう皆有失如古事今古少也
同抄云根合周防内ゆきわちよりえも
まくいへるんとよどうと有事も
坐て意すよへ如往不勝將共自是事也立
くうううううううううううううう
あり弘廢殿御のす合承成は仰あ
代まれねぬよううううううはま
以がれすあまで安ければ金業も
入う如せまよと誠と可思也といひも
まこと恵異事也如何もまた又如何ある
まこと事す

可憐の雨并詠

鳥部

卷之三

うのむかのこはけり
よしのゆきのまづや有
わらう

天子之堂
有司之室

卷之三

۲

あらゆ
國

卷之三

蒙古文

なむとくわの夜也可矣。余
の心も可体也
の心も有様禁中不可能矣
れども心結りて行けり
ひやくよ
こすりは

はのま
ひめ

丁巳年

卷之三

游
之
水
乳
牛
奶
水
牛
水

勿
須
所
有

م

わくまく
わくまく
わくまく
わくまく

ひ
み
の
み
る

ひまわりわらわ
ひまわりのまき

てのりよきうきなみ外
よれりてのりわらじとゆい
行けりよあめれしれいふくらせ
おるけいりまをじにじて
おわじれやあめりしれよ
おわじれやあめりしれよ
おまじけまよあくよわま
こしてさんみつづきしむだら
とおきてわとまくおとまくわ
とおきてわとまくおとまくわ
とおきてわとまくおとまくわ

時ハシマツひすとよのや はなやす
流れハリスなまくへる くふらう
あま、あそ じかに嬢 あわり
河カワたゆ 竹カクよ いのと なまごろ
うしりわ 雲クモくわ 月日といし
おれみ 無ナシ也 但有アリ剣ソル平ヒラ作タツ勝タケは實シテ平ヒラ作タツ勝タケ也
指ササく らえて しわの
迷ハラと かくにみえあすすりゑ
又アシにうりて かねまよのま
ちくいふるわうすのまきよ

のみ。うれどりて。先人御難。但可通
事。よし。かね。め。いして。のこじ。すい。
て。よ。ぬ。からん。くら。う。れ。ほ。ま。い。は。
くへ。す。業。鷹。を。令。よ。り。う。の。き。う。
ゆ。え。扇。の。ん。お。伝。夢。北。源。答。を。
可。依。松。や。源。川。水。中。文。記。英。追。年。上。れ。
お。せ。ら。も。さ。て。あ。り。て。ん。る。業。橋。し。れ。
朝。え。あ。う。と。わ。よ。か。う。北。夢。せ。た。
つ。ま。と。と。う。わ。ま。や。お。禁。中。あ。う。と。よ。
す。禁。づ。清。捕。朝。臣。制。例。拾。遺。尋。ね。て。
ん。う。か。い。よ。う。れ。捕。れ。荒。胡。臣。是。廉。保。
年。事。や。も。可。忌。き。但。下。打。制。事。され。
と。く。ら。ま。く。あ。う。同。と。す。り。仰。ま。れ。可。
忌。を。但。あ。う。と。よ。ん。い。妄。探。け。か。う。首。
將。竹。下。調。不。う。云。患。だ。つ。と。て。う。こ。や。う。と。
ひ。持。木。諭。く。又。可。禁。づ。捕。う。と。が。
は。け。く。く。あ。う。り。し。
も。あ。あ。う。こ。う。の。出。象。れ。

事や、持のるやうじまで隨恩出せんと
あらず准へ可けふ寫よ。我宿よりは
そば天法有令。胡患、わら風の持え
よきとより自撰ふまく撰へ通理す
事もあからず持業属は素改長れで
の事よ。あつてよりは、身の人の
所と被撰入年又文字と教ふるも
とれど、物もきくべき事も
よき。身合さぬよりかうる事と
みふはくもるひな。如屏風の墨字
多引まつて、いはくして、も
りくつとほんとすまではすよりを
なりほんとえはやく。是とまこと
てよめうよ人若かじつうすく大事な
ゆえに後江上月といつてもよれあわ
よみて用池後れの歴後野草よ。峰
生とよて用野松下としいつまへ用
山とよて用野下としいつまへ用
ひづるの君のくわくけんよりか
る不可勝斗野草もれまのやふ

といひつまへあり山家と水の板など
よろそひの氣をもいやしかうり何ふ
うる。都とくひづりんとくすとすとす
て多くえのりの、篇歌も二定ありぬ、
るや能くたりしもくへた其の不干物
と重てもゆきしと、或雖もへゆら
れすと暮後歌うちかげじよまでばゆの
事也

序の書

万葉集以下代々勅撰子細五代卷

号青家万葉集家家撰也二卷史
序曰寛平立裁秋九月廿五日下卷延
喜十三年八月廿一日之是他人撰也或

說源相云說之如何

樹下集二十卷多法眼源實撰

附序

去之集一卷附序

隆祚之集

御潤十卷抄

多法眼源實撰

拾遺古今文卷

教長有序

永花物語集

永花物語集

續韻記集古卷

有序長支源可為勅撰三集院崩仰

不逐

別照清印之卷抄 现今攢集

如古集不可勝計以小撰者不詳又古
人不用或又撰者尤通抄多不謂念而
入通打因

尼草子

稿本於法家

資仲以拾遺

空卷不與

立葉集六卷

尾張守稿風志撰

有西序故文作

松冷 松之 白河 鳥川 翁

五代官主

又号山階集撰南郊

每月次集抄

契齋文

重保而為

如古物通年又多皆不能用也

抄抄草

可葉集抄

立葉抄與之撰之
立葉抄不知撰之

類聚詩林

山上塔良撰有平章也
通惠說之

新撰定卷

莫之古今後撰但不參之
古今合三百首

金玉集一卷

不知撰

拾遺抄十卷

拾遺內音半首
花山或云行

深鏡抄

集

空山入通十卷

和漢朗詠抄二卷

行

新撰朗詠抄二卷

未後

前五十首

行

後五十首

通雅或足之

三十六人撰

行

續新撰

通後撰

以拾遺內三百首

明月抄

別季

類聚抄五十卷

仲庚
有序

悦月抄 基俊

相撲立

日私記詩序
二十卷乞

鄙林百卉卷

清呻吟集 卷一百首
百首之平卷

雜之平卷

諸家部類

撰不不知
知是院序有之

立代名取 危冕

如古物遠近不可勝計故而普通可用

注くじか解固鄙林抄一卷

蟹簾記抄

蓮露抄三卷

棄門集

既照私記 杂一僧経方

山中萬葉四集

右拾抄

匂集十卷

寒集亭非族也大に廣抄上科抄二卷

類聚古集大卷

敷陞抄 近日又以之未入之

定家式

秋經標式

參議藤

演成奉勅

孫姬式

有席

左撲作式

左撲奉勅

右見母式

芝安部清行

武田物乞

立家體體

新撲體體

立見

後承名君抄

清浦

緒諸抄

仲良

奥儀抄二卷

清浦

いか白女口傳陞源口傳以下歎之立危冕

童蒙抄清浦初學一字後成古來凡

所未也皆以明鏡也

又忠寧通母十所
不可勝計也

物語

行錄上下 大和上下 源氏五十四帖
古今物語非殘寂裏

雜く

家集 家詩合自禁中
如詩家 雜く而く

私記 凡手云誰人記大可忍

臺子十九帖信輔

現存集

般丸

拾遺現存集愚鑒

奇苑抄

般惠

現存集已下三箇度金撰集東門集以
前也而不被書入く來方以不審了也

三才集俊卿

花月集

印光

拾遺奇苑抄治承元年八月
松齋時光

豐藏

謹德

海平右更師氏

言葉

廣言

盧主信基師

六帖

六事

宇治大納言

聲聞

溪松中納言

狹衣大將

山陰中納云

有馬皇子

海人

孔產御子

破破

宇治橋北

住吉

世迷

患孫

清少納言枕草子

諸國守枕

日

和弓九郎論義

讀破

遊土日記

傳大納言每

雖以拾遺

讀破

新亦六人

基波

花辭

說諸毛

立撰

花風毛

山木髓鶴

波丸

卯花辭

良石

安若抄

雖山木髓鶴毛篇
寺入道作通不

後葉集

破調花集
長門萬國為比

今撰集

清伸

續現夜

敷伸放李

難可撰

結盛或不

雖千載

勝今
義作前日入道

三升集

貴辰

荆棘春花集

芝富

用林抄

御風

百景抄

大和前日

十六年十八畫

夏空

清伸

大原集

清伸

寶物集

康丸

明月集

宋周清源

玉苑集

後真

日下記

角雅集

類聚用

同名抄

別言集

唐李清源

古語拾遺

宋丁廣成
大中元年

平語抄

雅義抄

類聚

神中

二十卷
八股







